

観察を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no.100 Mar.

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 100 Mar. 2019



1/20/19

Y. K.



本学のうら山に植えられているミツマタを、雨が降った次の日に撮影しました。3月から4月が開花時期で、黄色い花を咲かせはじめていました。満開のミツマタを見るのが今から楽しみです(2019年3月5日)

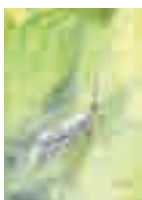
FIELD・NOTE

no.100 Mar. contents

特集

編む

- | | | | | | | | |
|--------------------------|--------------|-----------------|---------------|----------------|-------------|-------------|----------|
| 24 | 21 | 18 | 16 | 14 | 11 | 08 | |
| てくてく都留さんぽ
最終回 キャンパス探検 | 1時間200円の小さな旅 | 受け継がれてきた味 | 都留の風景写真集ー立春の候 | 「かなものや」さんを再訪する | 見守るような優しさ | 学びをつくる | |
| 42 | 40 | 39 | 38 | 35 | 32 | 30 | 28 |
| こてんさんぽ 連載最終回 星 | 好きなことをする空間 | センサーカメラが写した動物たち | フィールド暦 | 守り、つないでいくこと | 冊子を通して伝わるもの | ブラックうどんへの挑戦 | 変わらないもの |
| | | | | | | | 26 |
| | | | | | | | 遊びが始まる合図 |



表紙：成瀬洋平（本学卒業生。イラストレーターとして活躍し、執筆活動もおこなう）

『フィールド・ノート』のテーマ（地域を観察する・記録する・学びあう）で表紙絵を。北垣先生からそう連絡をいただいたとき、真っ先に思い浮かんだのがカワネズミでした。長年カワネズミの研究を続けられている先生のもとに集い、成長し、巣立っていったばかり編集部員。そして在学生たちによって綿々と引き継がれ、100号を迎えます。「大切なのは続けること」。ことあるごとにそうおっしゃっていた先生へのオマージュとして、この1枚を。



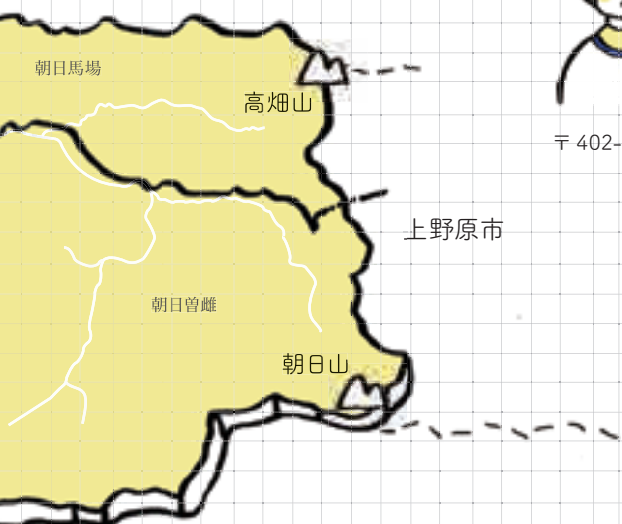
岩殿山

おしき
かみおしき

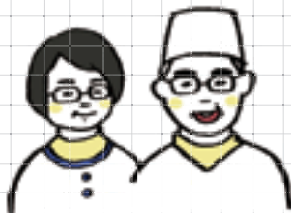
FIELD・MAP

今号で取材した場所

大月市



① 魚政 P.28-29



〒402-0053 上谷 5 丁目 8-9

② 伊万里 P.30-31

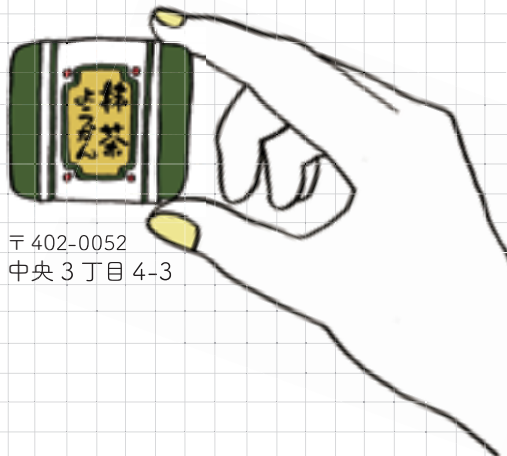


〒402-0053 上谷 3 丁目 3-9

③ 道志手帖 P.32-34

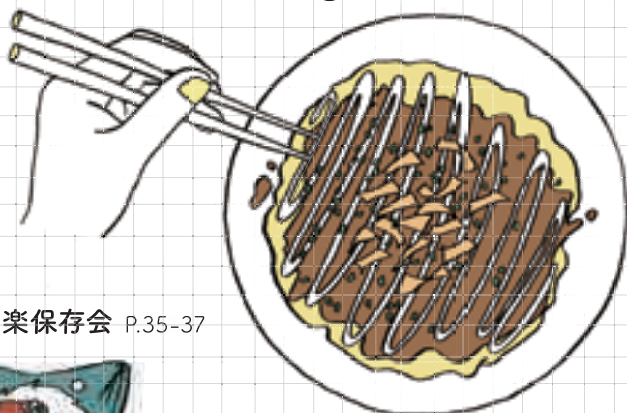


④ すがや P.18-20



〒402-0052
中央 3 丁目 4-3

⑤ ほり鉄 P.11-13



〒402-0053 上谷 1 丁目 5-21

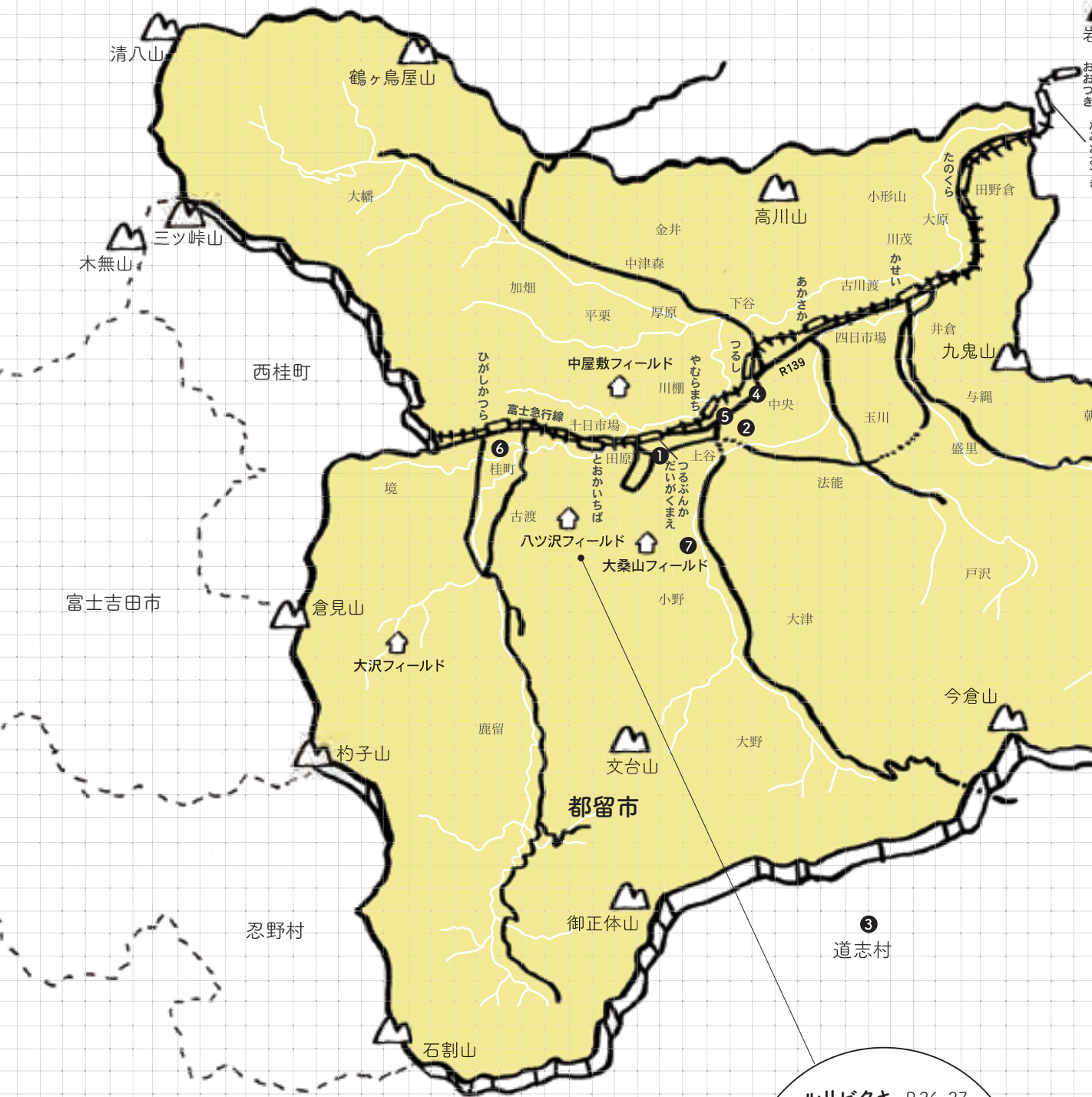
⑦ 小野神楽保存会 P.35-37



⑥ かなものや P.14-15



〒402-0034 桂町 1395-1



ルリビタキ P.26-27



山梨県甲斐市
面積 161.63km²
総人口 30,643 人
(2019 年 2 月現在)

編む

『フィールド・ノート』の過去号をひらくと、
たくさんの発見があります。
動物にはふだん見せない一面があること、
受け継いできた職人のこだわり、
まだ行ったことのないお店。
文章から伝わる魅力にワクワクしたり、
その人や自然の今を想像したりします。
もう一度あの人に会いたい。
そう思ったわたしたちは
記事に編まれた人や自然に、
じかに会いに行くことにしました。

FIELD-NOTE

新米
留
味の



W. G. K. K.

THE
FIELD-NOTE
EXPERIENCE

学びをつくる

『起き上がる朝』としてブックレットにまとめた本誌71号から80号の連載記事(※)は、遠藤静江先生自身が見てきたことや経験してきたことが綴られる。先日、「大田先生との出会いが今の私をつくっている」と、遠藤先生はおっしゃった。私はそのことばに興味をもって後日、話を聞きに行くことにした。

江利そらむ(社会学科3年) 文・写真

目に見える変化と向きあって

1月14日、遠藤先生のお宅を訪ねた。直前まで何から聞こうか悩んでいた私に「今日はこれとこれを話すね」と、リズムよく話を進めてくれる。遠藤先生は、なぜ大田先生と出会ったのか、そこから学んだことについて2時間ほど語ってくださった。そのあいだ私は質問を挟むことなくずつと耳を傾けていた。遠藤先



大田先生からの直筆メッセージが挟まれた本たち(2019年1月14日)

遠藤静江さん(86)

1932年生まれ。40年間、都留市の小学校や中学校で教員を務める。

大田堯さん(1918年－2018年)

都留文科大学元学長。本学名誉教授。

生の手元には大田先生からいただいたという本と資料がいくつも並んでいた。

1961年、都留市立禾生第一小学校から谷村第二小学校へ転動したのが遠藤先生にとって教育に対する考えを変えることになる転機だった。それまで教員というのは、なんでも一生懸命に、熱意をもってやればいいと思っていたそう。けれど「何を一生懸命にやればいいのかわかっていなかったのね」という。

谷村第二小学校へ赴任した遠藤先生は、それまで担当した生徒とは明らかに違う子どもたちのようすに気づいた。当時を振り返って「学校のなかで、子どもたちが非常に荒れていたの」という。九人いた当時の先生たちも、同じ悩みを抱えていた。「荒れている」原因をみんなで追究したそう。自分たちだけで子どもたちを変えていくことは難しいと判断した先生たちは、学校以外で子どもたちの身近にいる父母に、子どもの

ようすを説明することからはじめた。必死な先生たちに対して父母たちは「今度来た先生は子どもの悪口ばつかい」と理解してくれなかったそう。

先生たちは学校で話を聞いてもらうだけでなく、学区のなかに入り直接家の人と話すことや、じつさいに授業を見てもらうなど工夫をした。やがて1年かけて父母の理解を得ることができたという。

子どもたちの変化は社会の変化ともつながっていたと遠藤先生は話す。このころ普及したテレビを夜中まで見て、朝ご飯を食べずに来た子は集中力が続かなかった。機械化が生んだ生活リズムの変化は、食べものの皮をむくことやリボン結びなど面倒だと思ふことをやらないという状態も生んだそう。

先生たちは子どもたちが今、何を考えているのか。どんなことに影響を受けているのか。一人ひとりが感じてに耳を傾けたいという



冊子を開くと思ひ出話に花が咲く（2019年2月21日）

思いがあった。そのために力を入れる教科として「国語」を選んだ。文学作品をとおして、子どもたち自身で自分と向きあい、思いをことばにする力をつけてほしいと思ったからだ。ただ、国語の教科書では紙面の都合で文章が削られていた。情景描写が削られていることが多かったという。先生たちは、情景描写が文学作品に与える影響について研究をしながら、取り上げた文学作品の原作を印刷して授業をおこなうことになったという。

「人間いかに生きるか」

同じときに遠藤先生は、子どもの問題について学ぶため「全国幼年教育研究会」にも参加をはじめた。そこで出会ったのが講演をしに来られた大田先生だった。「そこが大田先生との接点なのね。もうそこから、大田先生にべつたり」と、遠藤先生。大田先生から遠藤先生はたく

さんの考えかたを学んだ。そのなかでも「子どもの教育は、学校だけではできない。学校と親と地域とみんながかかわっていかないと子どもの教育はできない」という考えかたを今でも大切にしている。当時の遠藤先生自身も、学校だけが子どもたちの居場所ではないと感じ、地域に出て父母たちとかかわるということをしていった。自分の実践と大田先生の考えが重なり、強く共感したという。「先生の実践も、話してくれたのとも、みんなそういうことだったの



大田先生との写真。前列左が大田先生（遠藤静江さん＝写真提供）

ね。子どもを育てるってことは『いかに生きるか』っていうことだってね。『人間いかに生きるか』っていうことが基本なんだって」。

つながっていく力

大田先生の考えかたに影響された遠藤先生は、第2回「都留子どもまつり」に参加をはじめた。都留子どもまつり実行委員では本学の学生と地域の人と一緒に、子どもを対象にしたお祭りをつくっていく。参加をはじめて、今年で50年目にな



毎年、担任した生徒と文集をつくった。同窓会のさいに渡すこともあるそう(2019年1月14日)

る。同じころ遠藤先生が設立した「都留詩友会」は今年で46年目を迎える。詩を書くことは、遠藤先生が日ごろからおこなっていることのひとつだ。そのため地域のなかだけでなく、担当する教室の生徒とも詩の題材を探したという。

「子どもに自由勉強として、詩の指導をしたのね。詩の指導っていうのは、もうね、あらゆるところで指導するの。うん。たとえば、詩の時間っていうのはないの。外に出て、風が吹いてきて、ぱーつとするとき、『風がポケットに入ったよ』とかいうでしょ。そうすると、『あ、それ詩になるね』って。生活のなかからすくいあげてを終始してたの」。遠藤先生は1年かけてクラス全員が書いた詩を『山梨日日新聞』に投稿したという。すると、子どもの活躍を近くで見ていたお母さんたちも参加するようになった。「地域の父母に結びつくっていても、特別の日についてのつちゅうじゃなくて、

もつと絶えず日常的に結びついていくっていう」。遠藤先生は、「都留子どもまつり」や「詩友会」でイベントがあると教室の子どもたちやお母さんたちも参加できるようにした。

私は、遠藤先生の活動がかかわりあっていることに気づく。興味のあることや関心ごとが全部、遠藤先生の行動力になっている。そして、その力がまわりの人をも巻き込んでいく。活動がつながっていく姿を見たようで、私は何かが始まるときのわくわくした感覚を覚えた。

「あのね。大田先生も、きちんと、現場にいる子どもたちを見て教育してるのね。子どもたちの問題が起これば、なぜ、この問題が発生しているのか。どうして、どうして、っていうのが常にあつたのね。私なんかも、そういうことをものすごく影響受けたのね。それが、一番、私の力になったような気がする。だから、先生のお話って、わかりやすくて、やさしい。納得がいく。机上の空論

じゃないから」。

担任する目の前の子どもたちを中心に、地域の人や先生たちと活動を起こしていった遠藤先生。そのなかで出会った大田先生とは、本学の学長だった6年間に、ともに学びあってきたとおっしゃる。本気になって悩んだり解決しようとお互いが思っていたからこそ、対等に話しあえたと当時を振り返る。現場で働く遠藤先生の声を聞くことができた大田先生も、学ぶことは多かっただろう。遠藤先生は、大田先生の姿を見て感動した日々が今の力になっていると話してくれた。

私はようやく、遠藤先生の活動の原点に大田先生との出会いがあるとわかった。それが「今の私をつくっている」ということなのだろう。私はいつも活動の中心にいる遠藤先生を見てきた。大田先生を見つめ影響を受けるその姿を想像すると、遠藤先生の新しい一面に出会えたよううれしくなった。

見守るような 優しさ

最近閉まっていることが多いなと思っていたら、『たこ焼き屋ひらい』のおばちゃん(伊藤千代子さん)が亡くなった」という噂を聞いた。ところがしばらくしてお店が再開している。「あれ？」と思い足を運んでみると、血縁ではない男性のかたがお店を継いでいるそうだ。どういうきっかけでお店を継ぐことになったのだろう。本誌80号(※)の「たこ焼き屋ひらい」の記事では、「話をしに行くお店」というタイトルで書かれていたが、現在のお店はどうなっているのだろう。ずっと気になっていた私は、お話を聞きに行ってみた。

窪田りさ(社会学科4年)=文・写真

高橋光(比較文化学科3年)=写真

子どもが買って帰るようす。メニューの値段はおばちゃんのころから変わらず、「子どもがお小遣いで軽く買えるくらいのラインは抑えつつ」設定しているという(2019年1月24日)

プリン屋からたこ焼き屋へ

1月24日、以前「たこ焼き屋ひらい」だった建物で「ほり鉄」という店を営む堀内雄樹さん(39)にお話をうかがった。外観や内装はほぼ変わっていないため、ぱつと見ただけでは「たこ焼き屋ひらい」がそのまま続いているようだ。なかに入ると、あたたかい空気に乗って、ソースと油の香りがふんわりとただよってくる。たこ焼き、お好み焼き、かき氷(夏限定)など、「たこ焼き屋ひらい」



2019年2月16日

のときと同じメニューも多い。

堀内さんは2018年7月の終わりからこのお店を始めた。もともとは移動販売でプリンを売る準備をしていたそう。6月のはじめにおばちゃんが亡くなり、代わりにここでやろうと決めたという。堀内さんの友人は「たこ焼き屋ひらい」の常連でおばちゃんと親しかった。堀内さん自身もたまに来て、おばちゃんに自分のお店を準備を相談するような仲だったそう。そしておばちゃんの旦那さんから堀内さんの友人に「誰か(欲しい人が)いれば、お店の全身全部あげるよ」という話が来た。その話が堀内さんにも伝わり、「たこ焼き屋ひらい」を引き継ぐことになったという。

「ここを絶やしたくないとか、高い志とかはそんなにないの」と堀内さん。そうあっさりと言いつつも、「俺が入ってなかつたら、おそらく誰もやらないで、シャッター(商店)になつてたと思うし」と深刻そうに話す。

小さな常連さんもある

お客さんを見ると、「ほり鉄」は子どもからおじいさんおばあさんまでに愛されているとわかる。どのお客さんも、たこ焼きやお好み焼きを持ち帰るとき、満足げな笑顔浮かべている。私も何度か持ち帰りを買ったことがあるから、気持ちがわかる。それはたこ焼きを8個入り350円で安く買うことができた、満足感だけから出た表情ではない。ビニール袋を持つとき、焼きたてほかほかの温度と、ボリュームがあることを想像させるずっしりとした重さが伝わってくる。だからつい笑顔になるのだ。お客さんの表情は、「たこ焼き屋ひらい」のときと変わらないだろう。

堀内さんはとくに子どもたちから親しみを込めて「ほりくん」と呼ばれているそう。店内に貼っている絵は堀内さんの姪っ子や同級

生の子どもが描いた絵だ。「ちょいちょい来てるうちにファンになってくれて、来るたびに、絵描いてきてくれた」と堀内さんは少し照れながら話していた。絵には「ほりくんだいすき」「やきそばたこやきおいしいよ」と書かれている。

さらには「ここ最近、週に2、3回来る子どもがいて。その子は確実にお好み焼きを買って帰る。食べていくパターンもあるんだけど、だいたいお母さんが迎え来て一緒に帰るときに、寄って帰る。お母さんが早くしろつつつてんのに、『ヤダ』って言って寄って。うん、しょっちゅう来る」と言う。

カウンターには子どものために



2019年1月24日



「自由にどうぞ」と、かごのなかにアメが置いてある。それを子どもがアメだけ「ぱくつ」と食べて何も買わずに帰っていくという話を、堀内さんは優しく笑いながら話した。

混み合ってもゆったりと

2月16日、私は再び「ほり鉄」を訪れカウンタ席に座った。土曜日のお昼どきということもあって店内の席は埋まっている。持ち帰りの注文も多く入っていて、堀内さんは忙しそうだ。私は堀内さんが以

前おすすめしていたぶた丼を注文した。すると隣の席にいたおばあさんと堀内さんが何やら小声で話している。どうやらあと1食分しかなかったぶた丼を譲ってくれたらしい。このかたは堀内さんのお母さん

だという。私がお詫びとお礼を言う、「いつも食べてるからいいのよ」と言ってくださる。それから5分ほどでぶた丼が出てきた。つやつやした味噌が表面についていて、5ミリくらいの厚さで切られた豚肉が輝いている。都留市産の「富士湧水ポーク」を使っているそうだ。柔らかい豚肉と甘辛い味噌が食欲をそそり、味わって食べているつもりでも、すぐに完食してしまった。



テーブル席を見ると、小さい女の子を連れたお父さんが、モダン焼きを一つ注文している。子どもの絵がたくさん飾ってあったり、アメが置いてあったりするので、小さい子でも居心地がよさそうな雰囲気を感じた。「まだー？」と言う女の子に、「おいしいものはできるのに時間がかかるんだよ」とお父さん。そういえば、この店では料理を待つのにイライラしている人を見たことがな

い。「クレームは一発もくらったことがない」と堀内さんが言っていたのを、私は思い出した。お客さんを待たせないよう、集中して鉄板に向かう堀内さんの姿が見えるから、「ゆつくりでいいよ」という寛大な気持ちになれるのかもしれない。

本誌80号で廣瀬はづ紀さんは、おばちゃんのお店「たこ焼き屋ひらい」を「話をしに行くお店」として書いていた。おばちゃんと話をするために訪れるお客さんが多かったからだ。反対に「ほり鉄」の堀内さんはどちらかと言えばあまり多くを語らない。けれど「ほり鉄」へ行くと、堀内さんの人柄やお店の内装から、見守るような優しさを受け取ることが出来る。初対面の人でも気さくに話かけて仲よくなれるようなおばちゃんのお店と、今の堀内さんのお店。店主は変わっても、同じ温度であたたかくしてくれる。

「かなものや」さんを 再訪する

富士急行線東桂駅で降りて国道139号線を大月市方向に進むと、道路沿いに建つ「かなものや」さんがみえてくる。今からおよそ10年前に発行された本誌61号(※1)に載っている外観写真と同じ風貌で、同じ場所にたたずんでいる。看板に書かれた「文具・たばこ・肥料」という変わった組み合わせをみて、ずっと前から気になっていたけれど、入ったことはなかった。今回の特集を好機とみて、お店へ足を運んだ。

時代の流れ

今回お話をうかがったのは、3代目店主の渡邊初廣さん(71)と奥さまの光子さん(70)。店内にはラジオが流れ、入って右手には駄菓子、左手には文房具が並ぶ。壁ぎわの棚の上にはプラモデルがずらりと並んでいる。「かなものや」という名前なのに、隅のほうでひっそりとしている金物たち。この不思議な品揃えには理由がある。61号によると、初

代のころの店名は「渡邊金物店」。金物が店の主役だった。けれど戦争中に金物関係はすべて供出してしまった。商売を続けるため小中学校が近かったこともあり文房具を取り扱うようになったそうだ。

61号と照らし合わせてみると、「かなものや」さんは10年前から変わっていないように思えた。けれどお話をうかがうと、時代の流れを痛感する。「かなものや」さんのような個人商店は高齢化がすすんでいる。しかし後継者がおらず、存続が難しい状況なのだそう。さらに問屋が店を閉めてしまうことで店が続けられなくなるといふ。「かなものや」さんも以前は山梨県の甲府市、静岡県、東京都に問屋があつたが、今では東京都のみになつている。問屋と個人商店は「持ちつ持たれつ」の関係だと、初廣さんはいふ。助け合うこともできるけれど、どちらか片方が苦しくなると、もう片方も苦しくなってしまう。

コンビニに文房具を買いに行く

それに加えて今は量販店がどこにでもあり、昔から営業している個人商店は減ってきている。「だから逆にいえば、東京にはないお店」と初廣さんはいふ。「こういうお店はいないあなんていわれるんだけど、いいなあなんていわれるわりにはお客さんこないから商売になんねえんだけども」。

東京の問屋さんから聞いたという話を初廣さんが教えてくれた。コンパスが欲しいと子どもが文房具屋にきたという。その子は「コンビニにいったら(コンパスが)なかったからここにきた」といった。文房具屋は文房具の専門店なのに、まずコンビニにいく子どもたち。昔ながらの雰囲気は漂う、今は数少ないお店に私も魅力を感じる。けれど便利さを優先して、なんでも揃う量販店へみんな足を運んでしまうのだろう。それでも「かなものや」さんには、



①



②



③

①お店の外観 ②新聞の切り抜き。その下には「元旦マラソン大会」の記録もぶら下がっている ③私が一番好きなポップ広告。ポップ広告を目当てに店内をじっくりみて回りたくなる

放課後になると子どもたちがたくさんやってくるそうだ。61号の「かなものや」さんの外観写真には、駆けながらお店へ入っていく子どもたちの姿が写っている。今でも変わらない光景なのだろう。

「子どもがうちにきてね、買い物仕方や計算覚えたり」。子どもたちが放課後に小銭を握りしめて、合計金額を計算しながらカゴにお菓子を入れていく。そんな姿を想像し

た。小学校の近くにこんなお店があったら、放課後が楽しみで仕方なくなりそうだ。

「かなものや」さんの光景

駄菓子子が並んだ棚は色鮮やかだ。

よく見ると、それが駄菓子のパッケージだけの色ではないと気がつく。駄菓子それぞれにポップ広告（※2）が貼られている。「印刷されたものよりも下手なほうが目立つ」

といって、これらは初廣さんが手書きで作っている。カラーペンでにぎやかにされたポップ広告たちには、確かに目がいく。商品名や値段だけでなくイラストも描かれた可愛らしさに、ついその商品に手を伸ばす。

レジの横には新聞の切り抜きがぶら下がっていた。東桂の子どもたちの活躍が新聞などに載ると、こうやって貼りだしているのだそう。「家とかでもみてるだろうけど、貼りだしてあるのは嬉しいだろうから」。光子さんが「（いつか）うちの孫がこうやって新聞に……。まだほど遠いけど」と笑う。

手書きのポップ広告も切り抜きの新聞も、スーパーマーケットなどの大型店ではみられない光景だ。どちらにもお二人の人柄が表れているように、思わずほえむ。

お話をうかがうことおよそ1時間半。小学校がまだ授業中だったこと

もあり、そのあいだお客さんはいなかった。「間がわるいね」、「サクラでもこさせるか」と二人で笑いあっていた。その笑顔とやりとりが素敵で、私もつられて笑ってしまう。

個人商店がうまくいつていないことは何となくわかっていたけれど、話を聞いてそれが現実味を持つて感じられた。そのなかには、こちらがさみしくなってしまうような内容のものもあった。だけど話を聞き終えてお店をでたとき、暗い気分にはならなかった。それは店内の雰囲気や話しかたにしみでる初廣さんと光子さんの人柄に触れたからだ。きつとお二人は、たとえ「商売にならな」くてもこの仕事が好きで、子どもたちのことが大好きなのだろう。小学生のなかにまぎれて頭一つ以上も飛び出した私が駄菓子や文房具を選んでいる姿はちよつと面白いけれど、また「かなものや」さんを訪れてお二人の人柄に触れたい。

杉浦茜（国文学科3年）『文・写真』



@ 本学うら山

写真集 都留の風景

—— 立春の候

2月に入りほのかに春の訪れを感じ始めました。寒さのなかにもどこか暖かさを感じられる。そんな都留の風景写真が集まりました。

江利そらむ(社会学科3年)=文・写真



上・中@ 本学うら山
下@ 上谷





カメラに笑顔を向ける賢一郎さん^{けんいちろう}と晶子さん^{あきこ}。うしろの味のある字は、賢一郎さんの妹さんのお友達が書いている（2019年1月24日）

受け継がれてきた味

本誌 78 号（※）で紹介された、和菓子「すがや」。工房で作業するようすとお話から、熟練した職人さんのこだわりが伝わってきた。記事を読むと、まるで一緒に工房をみたり和菓子を食べたりしている気分になる。わたしもここに行ってお話が聞きたいと思い、あらためて取材をさせていただいた。



和菓子「すがや」は、富士急行線都留市駅の手前富士吉田市側、国道139号線沿いにある。

1月24日の17時に、「すがや」へうかがった。外からみると、店内の暖かい光がきわ立っている。優しい笑顔で迎えてくださったのは菅谷賢一郎さん（50）。店内に入るとガラス張りのショーケースに和菓子がずらりと並んでいる。

自慢の餡子



賢一郎さんは、自分のつくる和菓子に自信と誇りをもっている。いちばんの自慢は餡子だ。「うちの餡子を美味しく食べてもらうための和菓子をつくっている」と賢一郎さんはおっしゃる。お店で人気のかりんとう饅頭も、まずは餡子に合うかどうかでつくり始めたそう。

「やっぱほかを食べてうちにかなわないんだよね。かりんとう饅頭とか色々なところで作られてる

けど。結局、最後にここがいちばん美味しいよねって戻ってきてくれるのが嬉しい」とおだやかな口調でおっしゃった。

本誌78号では、「できあがりはお木べらにすくったときの餡子の落ち具合で見極め、仕込みからできあがりまでおよそ6時間を費やす」と書かれている。毎日かなりの時間と体力を要する和菓子づくり。自慢の餡子をつくるために欠かせないのは、餡子をこすための「おとし」という道具だ。職人さんの手づくりであり、依頼している職人さんが亡くなってしまうたら、ひとつてにまた新しい職人さんを紹介してもらおうそうだ。「この前も職人さんが亡くなってしまうて。また新しい職人さんを探さなきゃならない。みんな高齢になってくるひとがいらない。職人さんによってつくりかたも違うんだよ」。編み目の細かさや粗さも指定しているという。穴が開くまで使うもので、

もって半年だそうだ。

自慢の餡子は、繊細な道具を使つて、長いあいだ餡子をつくつてきた経験や培った技術でできていた。

「本物」の和菓子をつくる



最近では機械で素早く和菓子がつくられるようになり、コンビニエンスストアなどで手軽に和菓子を買えるようになった。そんななか、手間をかけながら手作業で和菓子づくりをつづけている。「お客さんや、うちの嫁もそうなんだけど、本物を食べたときの反応が全然違うの」。こだわりをもつてつくった「本物」の和菓子をお客さんに食べてほしい。そんな願いがある。

「あと、使命みたいなもんですね」と微笑みながらおっしゃる。和菓子「すがや」は明治時代に創業し、126年目を迎えたそうだ。先代から味を引き継ぎ、創業当時から変わらない美味しさをお客さんに

提供している。「常連さんからしたら、味が変わったら『ん？ なんか変わった』ってなるし。代々味は変わつてないね」とおっしゃる。「材料の種類とかが変わっても味は変えない。季節も昔と違って湿度が高かったり乾燥したりするんだけど同じように」。変えないっていうのも大変なんだよね、といいながら和菓子について語る賢一郎さんの表情は真剣だ。それでいてゆつくりといねいに言葉を選びながらお話をしてくれる。

「本物」を知ったひと



奥さんの晶子さん（49）にもお話をうかがうことができた。2013年に取材されたときと変わったことをうかがうと、「昔より仕事の流れがわかったってこともあるかな。いつの間にかできるようになってる」と笑いながらおっしゃった。賢一郎さんも、「あれやつといてーっていつてね。みて覚えちゃ

うよね」という。晶子さんは、でもねとつづけて、「私は和菓子は嫌いだっただんです。餡子が苦手ですね。皮だけ食べて餡子を捨てちゃうくらい」。「すがや」に嫁いで17年、

今では賢一郎さんと阿吽の呼吸で作業をおこなう晶子さん。私は驚いて、「えーっ」と大きな声を出してしまった。ふふふつと笑いながら「でもね、本物を食べると違うなああって。口が肥えたっていうんですかね」とおっしゃった。

晶子さんやお客さんだけでなく、娘さんも「本物」を知った一人だ。学校から帰ってくると餡子をなめる習慣がついたそうで、『今日いいね』とかいつてくれたりね」と晶子さんは嬉しそうにいう。賢一郎さんは「一度、展示会かなんかでもらった餡子をわざと置いておいたら『なんか違うね』っていつて。わかるんだなああって」と楽しそうにおっしゃった。賢一郎さんと晶子さんは「そんなこともあつ

たね。それはいつだっけ」と何度も目を合わせていた。

和菓子から広がる縁



賢一郎さんも、晶子さんも、お客さんが美味しいといってくれることがいちばん嬉しいという。晶子さんは「うちはね、お客さんがお客さんに説明するんですよ。この和菓子はこうなのって。そのときに、あーいわなくてもわかってくれてるんだって嬉しくなりますね」とにこやかにおっしゃった。「すがや」の和菓子を絵はがきにして送ってくれるお客さんもいたそう。「ネット販売とか色々あるけど、ここにきてくれたお客さんを大切にする。都留はそんな広い町じゃないし、都留のひとが自信をもつてお土産としてもって行ってくれたり、それがまたどんどん縁として広がっていく」と賢一郎さんはおっしゃる。

お話をうかがっている途中にも

何人かお客さんが和菓子を買いにやってきた。そのほとんどが常連さんで、「すがやさんとは長いもんね」と一言一言会話をしてから帰っていった。和菓子を受け取るときの常連さんは嬉しそうだ。家族と一緒に食べるのかな、誰かに渡すのかなと、この場所から広がる縁を想像した。

自分たちの生み出すものを、「本物」だと誇りをもっているお二人。「すがや」は、先代から変わらない味を守り、受け継いでいる。お話をうかがっていくうちに、自分たちのつくる和菓子に愛情をもっていることがわかった。そんな和菓子をつくりつづけること、そして和菓子を食べたひとが「美味しい」といつてくれることが今のお二人の自信につながっているのだろう。

宇佐美温加（社会学科2年）＝文・写真
小林史佳（地域社会学科1年）＝写真



暖簾は10年くらい前から使いつづけている（2019年1月24日）



店内にあるショーケース。人気なのは、最中とかりんとう饅頭（2019年1月24日）

1 時間 200 円の 小 さ な 旅

本誌 76 号(※)で都留市内循環バスについて取り上げたのは、2012 年 8 月に運行を開始してから約半年たったころだった。当時の記録から、走るスピードもさることながら、車内の空間ものんびりゆったりとしていたことがうかがえる。私もその空間を味わいたくて、バスに乗ることにした。

平岡摩梨菜(社会学科 3 年) = 文・写真

市内循環バス 路線図

1 月 27 日に取ったメモより

- ・ 1 周の所要時間は 61 分
- ・ 1 日 6 便走っている
(左回り 3 便 右回り 3 便)
- ・ 乗車賃は大人 200 円、小学生 100 円、乳幼児無料
(交通系 IC カードでも乗車できる)
- ・ 1 日に走るバスの本数や乗車賃、バス停の数は約 6 年前と変わっていない(お店が閉まったことにより、名前が変わったバス停はある)
- ・ 「都留市駅」、「都留文科大学駅」、「芭蕉月待ちの湯」などのバス停では、待っている人がいなくても一度停車し、扉をあけていた



1 月 27 日 日曜日

—— 太陽の光を浴びる朝

この日乗るのは 9 時 30 分に「都留市立病院前」を出発する左回りの循環バスだ。一人バス停で待っていると、9 時 28 分にバスがやってきた。豪快な音を立てて車体の中央部にある扉がひらく。バスステップを踏み越えると、11 人分の座席が選びたい放題だ。私は後ろから 2 番目の席に座った。バスは定刻どおり走り出す。

朝のバスは大きな窓から太陽の光をたっぷり取り入れるためあたたかい。くわえて心地よい速度から生まれる揺れでとても快適だ。出発から約 10 分。本学周辺にさしかかる。車窓から眺める町並みは、目の高さも通り過ぎるスピードも、何もかもがいつもと違う。知らない町みたいだ。鍛冶屋坂トンネルを抜けると、車の数が減り道幅は狭くなった。このあたりからバスは後続車がくると端へよけるようになる。道を譲り、

心地よい速度を保っていた。

出発して約30分、「宮原」^{みやはら}を過ぎるとのぼり坂が増えてきた。つきあたりまでいくとひらけた場所であるつと回り、きた道を帰る。「芭蕉月待ちの湯」を過ぎたころ、バス停がないのに突然停まった。入り口がひらくとおじいさんが一人乗り、左側の席に座る。本誌76号で、「バス停から離れたところで降りしてほし」と申し出たおばあさんを、運転手さんは戸惑うことなく降ろす」と記録されていたことを思い出した。6年経っても変わっていない。

「芭蕉月待ちの湯」の次の「上戸沢」^{かみと}でも男性が一人乗り、私の後ろの席に着いた。乗客は三人だ。

—おじいさんとお話

私は車窓から景色をキョロキョロと見ていた。すると最初に乗ってきたおじいさんとふと目が合う。「話しかけてもいい?」と聞かれたので驚きながらも「いいですよ」と答え

ると、私の前の席に移動した。

おじいさんが話かけてくれた理由はスマートフォンにあった。ホーム画面がいつの間にか変わってしまっていたらしい。「朝起きたとき、この画面になってさあ、あの世にいった心地になったのよ。こうなつてもう1週間くらいになる」と困り顔で笑いながら話す。私はそのすがたを見て、どうしても直したくなり、スマートフォンをお借りした。私が直すのに一所懸命になつてみると、おじいさんが突然「おう」とあいさつをした。顔をあげると、相手は「引野田」^{ひきのだ}で乗つてきたおばあさんだった。お互い笑顔で言葉を交わし、おばあさんは左側の席に着く。そうこうしていると、スマートフォンが直つた。うれしくなりおじいさんに「直りましたよ!」という「とおお! これこれ! すごい! どうやった?」とペアつと表情が明るくなった。そして私の説明はそこのけで「直してくれた! やつぱ

り若い子は頭いいなあ」とおばあさんのほうを向く。大げさなほどほめてくれた。おばあさんも笑顔で「ねえ」と相づちを打つ。

おじいさんは「ありがとう!」といったあと、現在ベトナムに住んでいる娘さんから送られてきた、お孫さんの写真や動画を見せてくれた。「この子は2歳くらいでねえ」と説明する声はとても弾んでいる。しばらく話していると、おじいさんは急に表情を変えた。そして「降り忘れた!」と一言。私も一緒になつて慌てる。しかしおじいさんはその後二つほどバス停を見過ごし、私とお話をしてくれた。そしておばあさんと同じ「元姥沢橋」^{もとばさわはし}で「ありがとうございます。じゃあね」と笑顔を向けながら降りていった。10分にも満たない時間のできごとだった。

二人が降りると車内は一気に静かになる。ホカホカした気持ちで余韻に浸っていると、「赤坂」で女性が一人乗車した。足早に右側の一番前

の席に座る。そこから二つ先のバス停で「上戸沢」から乗った男性は降りていった。その後乗ってくる人はおらず、終着点の「都留市駅」に着いた。女性は住宅地の方向へ歩いていく。私はそれを見届けた。

1月30日 水曜日

—明かりをのぞきこむ夜

この日は17時55分、「都留市立病院前」発の左回りのバスに「都留市駅」から乗った。前と同じ席に着く。外はもう日が落ちかけ、道は帰宅時間とかさなつていて車が多い。いつも以上にゆつくり走るバスは、1日の疲れが漂う気だるい夜の空気を吸いこんで進んでいるようだった。

「都留市駅」や本学の周辺はお店が多いが、鍛冶屋坂トンネルの先にある「住吉駐在所前」^{すみよし}から「三吉入口」^{みよし}あたりはお店が少なく、民家がほとんどだ。だから朝と比べて、とても暗く静かだった。外を歩く人のすがたもあまり見られない。車内



夜、一番後ろの座席から撮った車内のようす。車内が明るいいため外の景色がより暗く感じられる(2019年2月6日)

から見える家の小さな明かりがひときわ光っているようだった。

——帰る人、いく人

「都留文科大学駅」で停車すると、おばあさんが三人乗ってきた。運転手さんが「お待たせしました」とい

うと、三人は「はい、お願いします」とあいさつする。みんなジャンパーを羽織り、ショルダーバックと買い物バッグを持っていた。「仲よし三人組」という言葉がびつたりだ。そのうち一人は赤い花束も抱えている。真ん中の通路を挟んで左

側に二人、右側に一人向き合うように座った。バスが発券すると、「あら、かわいい」、「あら、ほんと」という愛らしい会話が聞こえてくる。一人がショルダーバッグにつけていたキーホルダーのことだ。しばしお話は続いていたが、気づくと静かになっていった。ちらつと見ると三人は疲れた表情をしている。きつと一日楽しかったのだろう。

「住吉工業所前」でバスは停まり、三人のうち二人が降りていった。別れぎわに「ありがとね」、「じゃあね」、「気をつけてね」と手を振る。もう一人はそれから約5分後「田之元」で降りた。着くまでのあいだ、花束を抱えたまま居眠りしていた。

8分ほど乗客は私一人だったが、Uターンしたあと「西川」で、40代くらいの男性が一人寒そうに首をすくめながら「すいませーん」と乗ってきた。左側の席に座り、乗車賃である200円を用意すると、路線図をじつと見はじめる。バスに

乗るのが初めてなのかもしれないし、いったことのない目的地へいくのかもしれない。約5分後、男性は「玉川橋」で降りた。お金を払いながら運転手さんに「〇〇つてどこですかね?」とたずねる。運転手さんは「〇〇つてね、ここ越えてすぐの集落です」とジェスチャーを交えながら答えていた。

その日の一番最後の便。家に帰る人もいれば、出かける人もいる。

「都留市駅」バス停の標識の前で停車した。お金を払い、運転手さんに「ありがとうございました」とお礼をいう。バスステップから足を降ろし、アスファルトを踏みしめれば「帰ってきた」と実感する。それはスーパーマーケットから家路に着くのととは違って、自分の知らない町をたずねた帰りのような。日常から離れたつかの間の「小さな旅」から帰ってきたような感覚だった。



オオバノアザミの
ちんちんを吸って
いふと、

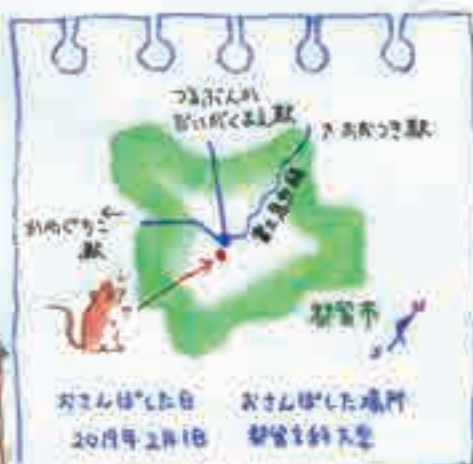


最終回 キャンパス探検

これまでの号でも、Eさんの
編集委員がキャンパスを歩いて
記録してきました。私もお散歩
しながら、今のキャンパスのようすを
なぐさめてみました。



1月31日に雪が降り 雪んパス
は一面の雪景色。
2月1日は太陽に照らされ
あちこちで雪溶けの
声にしました。



註釋

2014-2015



30. 2008

圖書館

5. 生館

5号館の建設にもない。附属図書館の裏に
あるピオターは埋め立てられました。

ヒオト7号の本は2号館の裏に、池の×印には
地盤改良研究センターの水槽に納めました。

現在は、エレクトロニクスなどの
物産の米代が、ちがほると
なっています。





遊びが始まる合図

キツツキ類が巣として使った穴だろうか。山道での鳥の痕跡の一つだ(2019年2月10日)

私の山歩きの楽しみは鳥を見ることだ。今号では本誌66号からの連載「森歩きの野帳から」(※1)にならって、2月10日と12日に元坂にある馬頭観音からうぐいすホールまでの「都留自然遊歩道」と、本学うら山の道を歩いた。私もよく歩く場所だ。今回は、鳥が立てる音を楽しんでみたい。

2月10日、この日は10時から歩きはじめた。元坂にある馬頭観音の手前で、さっそく鳥の鳴き声がある。「ギー」と短く鳴いているのはキツツキの仲間のコゲラという鳥だ。立ち止まってあたりを見回してみる。5メートルくらい先の、葉が落ちた木の幹にコゲラがいた。動き回りながらときどき木の幹をつついていて、「カツカツカ」とドラミング(※2)の音が小さいけれどはつきりと聞こえる。しばらくようすを見てみると「ツピツツピ」と「ジュリリュ」という別の鳴き声があった。姿は見えないがシジュウカラとエナガだろう。コゲラとこの2種の鳥は異なる種類の鳥ではあるけれども、混群といって一緒に姿を見ることが多い。しばらく姿を探したが見つからなかったので先へと進んだ。

2月12日に歩いたときには、同じところで

コゲラを3羽見かけた。この日は木をつつきながら、ピョンピョン飛び跳ねるように幹を移動していた。

頭上の鳥、足もとの鳥

2月10日、休憩所の近くまで来るとハシボソガラスが2羽「ガーツガーツ」と鳴きながら近くの鉄塔に止まった。止まってからも鳴き続けている。写真を撮っているとそのまま法能方面に飛んでいった。2月12日には同じ場所にトビが十数羽いた。歩いているときに突然「ピーヒョロヒョロ」と大きな鳴き声があったので空を見上げると、トビが鉄塔の周辺を飛び回っている。この場所ですごく飛んでいるのを見たのは初めてだった。鉄塔や電線に止まるわけでもなく、頭上を旋回している。このあたりは頭上に木の枝が少なく、上空を飛んでいる鳥が見やすい場所だ。しかし鳥がそのまま飛んでいってしまうことが多いので、ゆつくりと見ることができない。

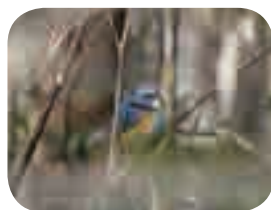
2月10日、休憩所から少し進むと、藪のなかからガサガサという音が聞こえてきた。小さな音が膝くらいの高さから聞こえたので鳥だろうと思い、道をそれて藪のなかに入って

※1「森歩きの野鳥から 第一回～第三回」西丸堯宏 2010年～2011年発行

※2 ドラミング：キツツキ類が木の幹や枝をたたく音などのこと



トビ(2019年2月12日)



ルリビタキ(2019年2月10日)



コゲラ(2019年2月12日)



ハシボソガラス(2019年2月10日)



アカゲラ(2016年5月12日)

みる。鳥は驚いたのか、少し離れた藪に移動する。青い背中に白いお腹。羽の特徴的なオレンジ色が見えたので、正体がルリビタキだとわかった。ルリビタキは藪のなかからこちらのようすをうかがっているようだ。こちらでも藪のなかから観察を続けていると、視線があつたあとに藪の奥へと飛んでいった。

かくれんぼ

2月10日、道をしばらく進み楽山^{たのやま}と大桑山^{おおくわやま}の間まで来ると、「ギャア」という鳴き声がマツの木のアたりから聞こえた。自分が鳴き声で判別できる鳥の声ではなかったので、正体ははつきりとはわからない。たぶんここで前にも見たことがあるカケスかアカゲラだろうと思いつつながらマツの木のほうを見る。このあたりはスギ、ヒノキが生えていて、その葉でマツの木が見づらい。鳴き声が聞こえたあたりを見ている鳥の姿を確認できない。しばらくすると「カカカカカツ」とコゲラより大きなドラミングの音が聞こえた。キツツキの仲間であるアカゲラだろうと思いつつ木の幹に注目するが、相変わらず姿は見られない。根気強くその場で待ち続ける。すると音が聞

こえていた木のあたりから飛び立つ姿が見えた。細身で、縦長の楕円形のシルエットからしてやはりアカゲラだろう。せっかくならはつきりと見たいと思い、その場で待つが現れない。鳴き声とドラミングの音は聞こえているのに、スギの葉が邪魔をして場所を特定できなかった。だんだん鳴き声が遠くなつていったので、アカゲラはそのまま奥のほうに飛んでいったようだった。

2月12日にも同じところで同じ鳴き声を聞いた。この日もこの場所で見ることができなかったが、そこから少し進んだ場所で鳴き声が聞こえた。その方向を見ると、前方の木にアカゲラが止まっていた。この日はなんの苦労もなくアカゲラを見ることができた。

山のなかでは音が鳥を見つける手がかりになる。耳をすましながら歩いて、なにか聞こえたら立ち止まってみる。簡単に見つかるのも嬉しいけれど、アカゲラのようになかなか見つからないのも、音をヒントに探すかくれんぼのようで面白い。山のなかで聞こえる音は私にとって、鳥を探す野遊びが始まる合図のようなものだ。

小俣漢和(大学院文学研究科1年) 文・写真

変わらないもの

本誌95号(※)で取材させていただいた「魚政^{うおまさ}」をふたたび訪れた。当時とは三町商店街にあったお店の場所や規模、販売のかたちが変わっている。たくさんの変化のなかに、変わらないものを見つけた。

常連さんに愛されて

ふわふわというよりはずっしり。甘い味つけだけれど、だしが効いていてくどくないから、ぱくぱく食べられる。私が「魚政」に厚焼き玉子を買に行くようになったのは、お店が移転してからだった。

「魚政」は、山田政秋^{やまだまさあき}さん(72)と文美子^{ふみこ}さん(69)が二人で経営し



店の前で微笑む文美子さんと政秋さん(2019年2月21日)



ている。移転前は鮮魚店だったけれど、今は厚焼き玉子専門店として新しく上谷5丁目に店をかまえた。移転後オープンしたのは2018年の10月7日。以前は鮮魚といっしょにお惣菜と厚焼き玉子売っていた。「うちが店を閉めるってなったとき、常連さんが『玉子焼きだけでもやったら』っていつてくれて」。やわらかい笑顔で文美子さんが話す。当時から、厚焼き玉子はお客さんに愛される看板商品だった。

新しいスタート

以前のお店を閉めたきっかけは、先代からずっと頼っていた東京都の築地市場の間屋が、豊洲に移転することを機に何軒もやめてしまうことだった。「今までいいものをお客さんに出したいって思いでやってたから、満足してもらえないものが揃わないと続けられないですからねえ」と政秋さん。まだ働けるしどうしようか、と二人で悩んでいたところ、知

り合いの板金屋さんから、山田さん夫婦の自宅前のスペースに小さなお店を建ててあげようという提案があったのだそう。

こうして再始動した新しい「魚政」では、昔からの常連客のほかに新しい層の客も買いに来るようになったという。本学に近い場所にあるため、授業のある時期は学生がよく来るのだそう。また新しく玉子焼き専門店として始めるにあたって、食べ歩きもできるような一口サイズも増やした。

「年末年始は厚焼き玉子の注文が殺到するため350本ほど焼いている」と前回の取材で答えていた二人。予約販売だけにしたにもかかわらず、昨年末は600本も焼いたそう。だ。「大人気でした」と、文美子さんはにつこり。「おかげさまでね。でもこんな予定じゃなかったんですよ。年寄り仕事でね、二人でのんびりコツコツやろうっていつてたんだけど、みんなが応援してくれるも

んだからだんだん忙しくなっちゃってね。政秋さんは、はっはと笑った。

「幸せなことですね」、「ありがたいこんですわ」と、笑い合う二人を見ている私も、おそらく二人と同じ顔になっていた。

焼く人と見守る人

厚焼き玉子を目の前で焼いて見せてくださっていた政秋さんは、「やつぱり、お客さんが『おいしかったよ』『また来たよ』っていつてくれるのがいちばんうれしいね。それで『〇〇にもらっておいしかったよ』とかいわれるとね、ああ、よかったよって」と話す。そのとき政秋さんが卵の液をフライパンに流し込んで、ジュッと勢いのある音があった。「このジュッという音がしないとダメ。うふふ」と文美子さんはいう。「そう、さっきは音しなかったから家内が気づいて。『あつはっは、監視役なの。焼く人と、見守る人』」。

二人が厚焼き玉子を焼くときと、言葉を交わすとき。そのようすはよく似ている。互いの及ばない部分を補いながら厚焼き玉子を焼き、会話をするのだ。二人の掛け合いを見ていて、自然と顔がほころんだ。これまでと今とこの先、きつとそれは変わらない光景だろう。たとえ私が何年か経ってここを訪れたとしても、二人が変わらないあたたかさで出迎えてくれる光景を思い浮かべることができた。

高橋光（比較文化学科3年）＝文・写真
江利そらむ（社会学科3年）＝写真



ブラックうどんへの挑戦

味工房・伊万里

富士急行線谷村町駅を出て、まっすぐ進む。突き当たりを右に曲がって50メートルほどのところに味工房「伊万里」はある。本誌52号(※1)で取り上げられたときは「黒ごまうどん」が看板商品だった。いまは「谷村ブラックうどん」が味わえる。どんな変化があったのだろう。記事をきっかけに、「伊万里」に足を運んだ。

(2019年2月19日)

1月27日19時、「伊万里」

を訪れた。お店は18時から23時まで開いている。道路沿いの看板に「伊万里」と書かれていたが、パッと見るとふつうのお宅だ。お

店に入ると、右手にカウン

ター、左奥に座敷が見えた。全部で30席くらいだろうか。「いらつしゃい」と迎えてくれたのは遠山恵美子さんだ。お店のことや旦那さんとの出会いなど、恵美子さんから次々とエピソードが出てくる。聞いていると、どんなお話に引き込まれていった。

昨年「伊万里」は開店25周年を迎えた。最初の5年はテナントを借りていた。今の店舗になつてからはちょうど20年になる。ぐるりと店内を見回すと、「人気メニューランキング」や「谷村ブラックうどん!」などのポップ広告(※2)が見える。メニューに目を移すと、「夜の手打ちうどん」という気になる文字を見つけた。たずねてみると、「伊万里」は手打ちうどん居酒屋としてオープンしたそう。お昼に手打ちうどんを食べられるお店はあっても、夜に手打ちうどんを食べられるお

店はなかったから、と恵美子さんは教えてくれた。マスターこと夫の政之さん(58)は10年ほど板前をしていたこともあり、うどんの味にもこだわりを持っている。

谷村ブラックうどんの誕生

谷村ブラックうどんを注文すると、15分ほど出てきた。吉田のうどんのように太麺だが、麺の色は黒い。作るきっかけがうたと、「いつも同じものではなくて変化が欲しかったから」。谷村ブラックうどんの前には本誌52号で登場した「黒ごまうどん」を作っていた。しかし、ごまは油を出すため麺作りには適さなかったそう。メニューに載っていたのは3、4年だった。「試行錯誤を繰り返して、とうがらしを練りこんで赤色のうどんを作ってみたけど、不評だったの」と恵美子さんは話す。「そのときに(都留市にある)『炭香ファーム』の作っている、炭を食用にした粉を練り込むことを思いついてマスターに相談したら『そんなの簡単だよ』といわれて作り始めた」とおっしゃる。しかし、じつさいに作るのは難しかったそう。

谷村とつけたのは、恵美子さんの実家が谷



(2019年1月27日)

①だしは数種類の味噌と醤油を混ぜて作っている ②リンダママとは恵美子さんのこと。お店に入る前から気遣いを感じる ③店内には谷村ブラックうどんの記事の切り抜きやテレビの放映予定などが多く貼られている ④恵美子さんが八百屋をされていたころ、野菜の届け先で政之さんが板前をされていたことがお二人の出会いだった



③

(2019年2月19日)

村町であり、「谷村を愛してるから」と力を込めていう。「伊万里」のあるあたりは、合併して都留市になるまで「谷村町」という地名で呼ばれていた。「ここが好き」という思いのつまった恵美子さんならではのお話だ。食するときには3種類の調味料が出てきた。「まずはそのまま、それからお好みでラー油と特製香味とねぎ油を入れて」と恵美子さん。ねぎ油は初めてだったので、ためにひと回し入れてみる。するとふわっとねぎが香ばしく、うどんの味が引き立った。私が「これすごく合いますね」というと、「そうでしょ」と恵美子さんは嬉しそうだった。

都留にしかないおみやげを

「人生でいちばん悪戦苦闘したのが谷村ブラックうどんの商品化」と恵美子さん。長期間保存がきくようにし、今はおみやげとして「道の駅つる」にも置いてもらっている。お店でうどんを出すことと商品にすることはまったく違うものだったそう。政之さんは当時を振り返って「食材を持って加工会社に行って、作ってくれるといったのに裏切られて連絡がつかないってこともあった」と話す。

すると恵美子さんは「できたと思ったら、味が違ったんだけど、そしたらマスターが『こんなもの捨てるだ』って全部ポイって捨てたの」と笑顔で話す。そうだったと政之さんもうなずいていた。政之さんの横で恵美子さんが見守るようすが想像できた。一人で悩まず、二人で作る。そんな関係が少し見えた。商品になるまで丸2年以上かかった。そこから軌道に乗り始めたのはここ2、3年の話だ。「一つの商品ができるのはこんなに大変なんだって思った。でも都留市にしかないおみやげを作れたかった」と政之さん。お二人の話から、迷ったり悩んだりしながらも、熱意を持ってうどん作りに挑戦してきたことが伝わってきた。

うどん作りは苦労したお話も多かったけれど、お二人から暗い雰囲気は感じられない。むしろ、笑顔を交えて楽しい思い出を話そうだった。壁にぶつかると、一人だとつらいだけかもしれない。しかし、二人ならあとで笑い話に変えられる。支え合って挑戦するという姿勢がすてきだ。

佐藤琢磨(社会学科3年) 文・写真



左『道志手帖』配布先のお宅での写真(香西恵さん＝写真提供)/下『道志手帖』創刊号と2号。全16ページ、フルカラー印刷になっている

冊子を通して 伝わるもの



本誌81号(※1)の「村で冊子をつくること」から、本学『フィールド・ノート』編集部卒業生の香西恵さん(28)が『道志手帖』という冊子をつくっていることを知った。どうして大学を卒業してから冊子をつくり続けるのだろう。気になった私は香西さんにお話を聞かせてもらうことにした。

香西さんに初めてお会いしたのは1月24日。「月に何回か都留には買い物に行くんです」というお言葉に甘えて、道志村から来ていただいた。細長い指に華奢な肩。香西さんは森林での活動や農作業、道志村の広報活動もされている。小柄な体の、どこにそんなパワーがあるのかと考えてしまう。香西さんは話をするとき、しっかりと私の目を見てほえみながら、敬語で接してくださる。先輩を前にして緊張していたが、そのおかげで安心してお話を聞かせていただくことができた。

書くこととの出会い

香西さんが初めて人に読んでもらう文章を書いたのは高校生のとき。「林業講座」という授業を取っていたという。そのときの先生から「森の聞き書き甲子園」を紹介してもらったことが、書くことのきっかけになったそう。森の聞き書き甲子園」とは、森にかかわる仕事や暮らしをするかたから聞き書きをおこなうというものだそう。

「(そのときに受けた影響は)すごく大きかったですね。『森とひと』っていうテーマだったんです。なので森とのかかわりっていうのが聞けるのかなあって行っただけですけど、それだけじゃなくて。私が聞いたのは83(歳)になる樽職人のかたで。子どものころは戦争中とか、そういう生いたちみたいところから、樽のつくりかたも、もちろんあるんですけど(生いたちを含めて)すべて聞くっていうのは、高校生で多分

初めてだったので、すごく面白いなあって」。

香西さんは一言ひとことを大切にすかただ。答えてくださるときも、数秒考えてから言葉にする。言葉数もあまり多くはない。そのなかでも文章を書くきっかけを詳しく話してくださるのは、本当に大切な経験だったからなのだろう。

『道志手帖』が届くまで

聞き書きの経験から、文章を書くことに興味を持った香西さんは、本学に入学後、本誌の編集部員になった。在学中に書かれた香西さんの記事は、自然に焦点を当てている記事が多く、注意深い観察力と惹きつけられる表現が記事にあらわれている。とくにそのことを象徴していると感じたのは、「ひろいもの」(※2)という記事だ。この記事は香西さんが都留市で「ひろったもの」について書かれた連載記事である。「ひろいもの」は落ち葉やシカの角、

スズメバチの巣までさまざまだ。「山梨に来たばかりのころは本当に何もかもが新鮮だったのでびっくりするというか、ほんのちよつとしたことなんですけどその発見をほかの人に伝えたいなって」。最終回のまとめには「(ひろいものとは生き物の)おとしものが手元に届くことで出える。手紙のようなものかもしれない」と書かれていた。

香西さんは卒業後、卒業論文の執筆をきっかけに出会ったかたの紹介で、道志村の「地域おこし協力隊」の一員となった。協力隊とは、別の地域から移り住んだ人が地域おこしにかかわる活動をおこないながら、その地域への定住をはかる総務省の制度だ。不安はなかったのかと聞きすると、「都留の隣で、お世話になったかたがいて、まったく知らない場所というよりは、何かご縁がある、いいところだろうなって」とふりかえる。

募集時では、おもな活動内容は森

林関係の仕事だと知らされていたそう。しかし、じつさいは香西さんたちが道志村で初めての協力隊であったこともあり、思った以上に自由にできる環境だったという。そこで大学卒業後も続けたいと考えていた冊子づくりで、道志村の力になろうと思い、取り組みはじめた。

冊子の名前は『道志手帖』。表紙をめくると、「どうしてどんなところ？」という疑問から冊子にはじまったと記されていた。『道志手帖』の略称である、「ドウシ・テ」にもそのことはあらわれている。村の外から来た隊員が、村での生活で気になったことや発見、驚きを伝える冊子になっているのだ。香西さんも「毎日驚きでいっぱいだったかもしれない。道志は道志で、植物の呼び名に固有名もの、方言とかがあったりするんです。お正月にサワガニを食べるとか、家や地域ごとにいろんな習慣があるんです」と多くの発見をふりかえる。冊子づくりは、ほかの協



『道志手帖』14号の取材で、香西さんがサイロのなかに入っているようす（香西恵さん＝写真提供）

力隊のメンバーの協力もあり、スムーズに進んだ。創刊号発行から5年以上経った今でも、メンバーへの感謝を多く言葉にしていた。できた創刊号を手にとったときには「感動が（ひとしおでした）」と話す香西さん。お話を聞くなかで、一番うれしそうな表情だった。企画立案やデザイン、取材などから、印刷所の手配まで、ほとんどのことは一人でおこなっているという。創刊号は三人の協力隊員の手配りで道志村の

650世帯に届けられた。それをつくっけに『道志手帖』が道志村のみなさんに知られていった。

心が動いたら

道志村の酪農に興味を持てば、サイロ（※3）のなかへ入り高さや温度の感じかたを自分の体で確かめる。踏みしめる地面が気になると、何万年もさかのぼって村の大地の成りたちを調べ、化石や鉱物について図にまとめる。家の軒先につりさがる干し柿をみると、つくられているかたのお家をたずねて、干した数から、柿の調達先まで質問をする。これらは『道志手帖』14号、18号、21号の特集ページで香西さんがおこなったことだ。『道志手帖』のほんのわずかなページであるが、香西さんの好奇心が強く、行動力があるということが伝わってくる。

また、『道志手帖』は協力隊の活動報告や村の歴史、文化の記録、さらには道志村の魅力を村外のかたに

届ける役割をになっている。そのため、地域の魅力を再発見できる記事や、協力隊と地域のかたとの交流をえがいた記事を載せている。そのなかの詳しい情報に加え、香西さんの視点で書かれた文があるから、さらに面白い。

冊子をつくり続けるのは

ずっと気になっていた「どうして冊子をつくり続けているのか」ということを香西さんに聞いてみる。「道志で冊子をつくり続けているのは、道志にいる楽しみたいなもの」と教えてくれた。

楽しい、と思える瞬間は「やっぱり、知らないことを知ったとき」と香西さんはいふ。「その、こんな場所があるんだとか、こんなことがあったんだ、とか。うーん。単純に面白い。道志村について知ることが増えるっていうのがうれしいですね。」

さらに香西さんには「いろんなかたと一緒につくれたらいいなあ」と

いう思いがある。その思いもまた『道志手帖』をつくる原動力となっているのだ。『道志手帖』には、地域のかたの手描きイラストや読者のかたの「声」が掲載されている。冊子の感想や意見、激励のメッセージ、次に取り上げて欲しい場所の要望がぎっしりと書かれていた。

香西さんには、冊子づくりを通して道志村のことをもっと知りたいという気持ちがある。その気持ちで地域の自然や歴史といった、あらゆるものへの興味をかきたてているのだろう。学びは、自分のすぐ近くにあるものからたくさん得られるのだと教えていただいた。

都留市で私が暮らすのはあと3年。この期間でどれだけの発見を経験することができるだろう。香西さんと『道志手帖』に出会い、さらに都留というまちを歩きたくなった。

小林史佳（地域社会学科1年）＝文・写真



守り、つないでいくこと

小野神楽保存会が出していた新聞。この新聞は2005年の再結成時から30号ほど発行され、回覧板として地域で読まれていた(2019年3月5日)

本誌76号(※1)で紹介されていた小野地区に伝わる小野神楽。当時の代表だった武井邦夫さん(75)にお話をうかがっている。記事には武井さんを含めた小野神楽保存会の神楽に対する熱い思いが書かれていた。現在、保存会は別のかたが代表をしているそう。それから6年。あらためて再結成から今に至るまでの歩みが知りたい。そう思った私は小野地区に足を運び、保存会のかたに会いに行くことにした。

小野地区は鍛冶屋坂トンネルを抜けた先にある。現在この地域の神楽を守っているのは20名ほどの「小野神楽保存会」のみなさんだという。小野神楽保存会は、小野神楽の保存のために結成された会だ。保存会はもとも40年近く前から存在していたが、時が経つにつれて衰退していった。それに危機を感じた地域の有志のかたが2005年に再結成する。長年神楽に携わってきたかたが

たを「師匠」と呼び、神楽を教わったのだそう。

再結成から今まで

最初に小野地区を訪れたのは1月20日。そのときに私が知っていたのは前代表の武井さんのお名前だけだった。それを頼りに地域のかたにお話をうかがう。みなさん神楽について知っていることを教えてくださった。そのなかには武井さんのお話もあり、すぐにお宅を教えていただくことができた。突然訪れたにもかかわらず、武井さんは私を温かく迎え入れて話をしてくださる。

再結成当時から今にかけて、小野神楽自体は変わっていないという。小野神楽にはお祭りで踊られる四つの舞や、新築した家で悪魔祓いとしておこなわれる「剣の舞」、余興の一つで獅子がてまりを飲む「たまのみ」などいろいろな舞がある。ほとんどの舞は師匠さんたちからすでに受け継いでいるそう。そうして神楽

をうまく保存しているいつぼうで、神楽を取りまく状況は少しずつ変化してきているようだ。

過去に武井さんが書かれた小野神楽に関する資料に、発足の経緯を説明している文章(※2)がある。そのなかで、保存会の立ち上げを願う師匠さんたちや地域の人の声としてこんなことが書かれていた。「今の時期を逃したらもう終わりだ、なんとかしてくれ」。「神楽を保存することとは大変だが、保存会を立ち上げる機会は今しかない」。これを読むと地域のかたが小野神楽の存続を強く望み、熱意をもって保存会を再び立ち上げたことが伝わってくる。それでも時が経つごとにお祭りに来る人や協力してくれる人は少なくなってしまった。今では少人数でやられているのだという。

武井さんは代表を交代した後も、神楽に使う道具が新しくなると聞くとうれしくなるそうだ。保存会から離れて6年たった今でも、神楽を思

う気持ちは変わらないのだろう。

「今は宮沢宏さん^{みやざわひろし}についていうかたが代表やつてるから、現状っていうのはそこいつて聞いてもらったほうがいいよ」。そういつて武井さんは小野地区のなかでも中小野集落^{なかおの}にお住まいだという宮沢さんのお宅を教えてくださいました。

神楽が果たす役割

訪ねてみると、現保存会代表であり、自身も太鼓をしている宮沢宏さん(67)にお会いできた。冗談を交え、明るい雰囲気でお小野神楽保存会のことを教えてくださいました。まず、過去の取材から6年経った保存会について「あまり進展がない」そう。唯一の動きは、都留市にある神楽保存会が集まった「都留市神楽連盟」がおととしにでき、小野神楽保存会も参加したこと。そのためほかの神楽保存会との結びつきは強くなった部分はあるようだ。しかし小野神楽保存会に限ってみると、大きな変化

のない6年間だったという。

現在、小野神楽の特徴としては、女性も参加できるというものがあるそう。これは保存会が再結成されるとき、より多くの人に関心をもってもらうために始まったものだ。もし母親が神楽を始めれば、きつと子どもも一緒に来る。そうすれば参加者も増えるし、神楽の練習の場が親子の交流の場にもなるのではないかな。そう考えたからだという。じつさに武井さんのまわりのかたに神楽のお話をうかがったさい、そんなふう

に親子で神楽をしていたかたもいらつしやつた。お二人がこれからにつなげていきたいのは舞だけではなく。地域の人びとの心をつなぐという役割だ。みんなで神楽を練習して一緒に守っていくことで交流の場ができるのだという。

お話のなかで神楽の練習風景の写真を見せていただくと、子どもからお年寄りまでみんな楽しそうに練習をしていることがわかる。保存会が



『小野神楽新聞』に掲載されていた写真の一部。2006年の秋祭り特集号のなかのもの。性別や年齢に関係なく楽しそうに練習をするすが写っている(宮沢宏さん=写真提供)



現在、保存会代表をしていらっしゃる宮沢宏さん（2019年2月26日）

守りたいものはこの笑顔が生まれる場所なのだと感じた。

守っていくために

小野神楽のこれからの夢について聞いてみた。宮沢さんは神楽で太鼓をしているが、趣味でギターもやっているそうだ。「楽器とか、ギターとかさ、そういうものとかラボっていかさ。なんか、面白いよね。邪道だつていわれちゃうな。でもね、

若者が目つけてさ、ベースとかもさ」。将来の展望を語るようすはとても楽しそうだった。神楽と色々な楽器のコラボレーション。難しそうなことだ。しかし新しいことをどんどん取り入れていく保存会のかたがたなら、いつか実現するような気がした。

それから宮沢さんは、小野神楽だけにこだわる必要はないとおっしゃる。「いろんな趣味とかと同じようにね。都留市じゅうで、ここの地域

（出身）でない人だつて神楽やつてくれればいい。学生さんとか仲間になれたら、今度は自分とこに帰ってもそれは広がる要素だよ。音源はさ、ネットとか、そういうのでどんなあげてけば誰だつて聞けるんだからね。そういう時代だとお祭りの日だけでも来てくれればそれでもいい。外国人だつていい。そういう道もあるよな」。あまりに柔軟な考えだったので、最初は驚いた。でも、そんなふうに気軽に神楽に参加でき

るのならやつてみたいと思う人も増えるだろう。

今まで神楽に縁のなかった人が来れば、そこにはまた新しい交流が生まれる。私は年に数回のお祭りに地域や国の垣根を超えて人が集まり、神楽を舞う姿を想像してみた。いつも練習している保存会のみなさんの神楽に比べれば、不慣れな舞になるかもしれない。それでも神楽をやりたい人がいろんなところから集まって舞うようすを見てみたい。

これまで私は神楽のような伝統文化に堅いイメージをもっていた。私の地元にも神楽はあったが、まわりにやっている人もいないし、つい自分には縁遠いものだと考えてしまっていたからだ。でも宮沢さんがおっしゃっていたくらい気軽なものだったらやつてみたいと思う。

今回、お話を聞いたことで、伝統文化やそれに携わる人への印象は変

わった。もともとは自分に縁がないものと考えていたからだろうか。「昔の考えを大事にする人が多そう」という印象をもっていた。しかし武井さんと宮沢さんはお二人とも状況に合わせてる柔軟さをもっている。お二人とともに小野神楽を支えてきたみなさんもそうなのだろう。そんな考えをもつことができるのは保存会のかたが、小野神楽の舞だけではなく、そこに生まれる交流の場も守ろうとしているからだを知ることができた。これからも少しずつ小野神楽のかたちが変わっていくかもしれない。それでも、そのまわりの人々の思いはきつと変わらずにつながっていくのだろう。

次に神楽を舞うのは3月31日。小野熊野神社で、新しくなった神楽堂がお披露目される。まずはお祭りにいくことから。そして私も少しずつ小野神楽を知って、守り、つないでいく流れの一部になりたい。

豊増華歩（国文学科1年）Ⅱ文・写真

今号で撮影した生きもの



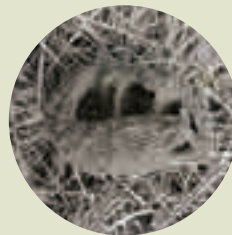
ジョウビタキ

お腹の鮮やかなオレンジ色が特徴で、ひらけた場所にいることが多いです。 田原(2019年1月28日)



コウバイ

開花時期はしだいに早くなっています。この日は数輪の花が咲いていました。 本学(2019年2月5日)



ドロバチの仲間の巣

泥でつくられた巣は重く頑丈です。なかには幼虫のための部屋が三つ見えます。 本学(2019年2月14日)

フィールド暦

これまでの号で取りあげた
注目していきたい生きもの

寒さがつづく都留市ですが、日中はすこしだけ春を感じることができます。ここでは2019年1月から2月に会った生きものたちと、都留市の生きものたちの変化を見ていきます。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



ヤマネ

日本の天然記念物のヤマネは本学のうら山でも生息が確認されました。木の実や昆虫などを食物とし、樹皮やコケなどで巣をつくります。 田原(2004年9月9日)



キアシドクガ

本学周辺でも5年ほど前から大発生するようになりました。「ドクガ」という名はついていますが、毒はありません。 本学(2016年5月25日)



シモバシラの氷柱

シモバシラは秋に花を咲かせます。その花が枯れた後、まだ生きている根が地中の水を吸い上げ、茎のまわりに氷柱をつくります。 本学(2018年1月23日)



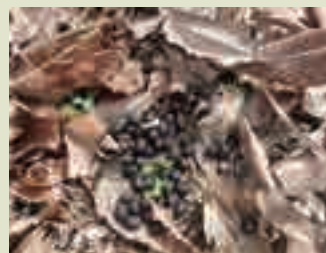
アオマツムシ

数年前から、本学周辺でアオマツムシの音が聞こえるようになりました。年々、個体数が増えているようです。 本学(2018年10月5日)



イソヒヨドリ

近年は学内でも巣立ち雛が見られるようになり、近くで繁殖しているようです。都留市内では春から秋によく観察されます。 本学(2019年2月4日)



シカのフン

大きさ約1.5センチのシカのフンを発見しました。近年都留市ではシカが増えていて、学内にまで来ているようです。 本学(2019年2月25日)

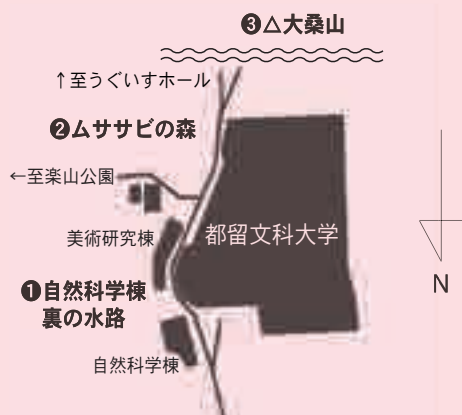


センサーカメラが 写した動物たち



本学フィールド・ミュージアムでは、本学のうら山にセンサーカメラ（赤外線を感じると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今号では、昨年の10月～12月に撮影された動物を紹介します。また、今回は過去に撮られた動物についても見ていきます。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



ハクビシン (2018年10月23日 23:54) 撮影地: ①

特徴は顔の中央部にある白い帯です。東南アジアが原産地とされています。木登りが巧みで果実などを食べる雑食性です。



タヌキ (2018年10月29日 1:33) 撮影地: ②

本学のムササビの森ではよく記録されている動物です。木の実や昆虫などを食べる雑食性で春に数頭の子どもを産みます。おもに夜行動します。



ニホンジカ (2018年12月27日 2:47) 撮影地: ②

立派な角をもつオスです。季節に応じてササや木の実、樹皮などさまざまな植物を食べます。前号ではメスの姿も記録されました。

うつりゆくうら山の動物たち



ニホンカモシカ (2011年5月10日 10:36) 撮影地: ③

ニホンカモシカはもともと標高の高い場所で暮らしていました。近年は、本学周辺の森でも記録されるようになりました。



ノウサギ (2011年10月2日 17:12) 撮影地: ③

日本固有種のノウサギは、森林や草地など多様な環境で暮らしています。近年、本学周辺の森では、ほとんど姿を見かけません。



好きなことをする空間

今年80歳を迎える金勝^{かねかつ}紀恵^{のりえ}さんは、都留市下谷で洋裁・編み物・和服リフォームの教室を開いている。本誌79号(※)で取材をした前澤さんも、私と同じように彼女の笑い声につられ、この教室で話を弾ませていたことだろう。



「鍵編み」という方法でセーターを編んでいるようです。スッと眼鏡をかけると、慣れた手つきで鍵棒と手を前後に行き来させていた(2019年2月6日)

自分の手でつくること

この日、金勝さんが着ていたカーデイガンは彼女の手づくりだった。明るい表情に鮮やかな赤色がよく似合っていた。

石油ストーブを背に、熱々のコーヒーを飲みながらゆっくりお話を聞いていく。洋裁と編み物に50年以上かかり続けてきた金勝さん。はじめは写真に携わる仕事に興味があったそう。しかし、幼いころから自分で服をつくっていたことや親からすすめられたこともあり、洋裁の道に進むことを決意した。これまで洋裁や編み物を勉強してきた金勝さんが、今いちばん凝っているのは古い着物をほどこいて別の服にリフォームすることだ。「着物がすごく地味でも、服にしてみたらずいぶん意外と派手に見えるっていうか、着心地がいいっていうときがあるんだよね。それでその服を自分で着てよそに出かけると



余った布を活用してつくったネックレス(2019年2月6日)

『すてき』とかいわれることがあるのよ。ちょっと褒められちゃうっていうか」と頬を赤らめる。

また、ほどいた着物を半分使って残りを捨ててしまうのはもったいないため、余った生地はコースターやカバンなどの小物に再利用する。材料に無駄のないよう、効率よく作業をおこなうのだ。お話の途中、愛猫モモちゃんが私の足元に来て体をすり寄せてきた。モモちゃん的首輪も手づくりだ。こんなふうに、金勝さんのアイデアで身近にあるものが手づくりになっていくことがとても素敵に感じた。

意外な一面

数日後、いただいた帽子をかぶりもう一度会いに行った。金勝さんは私を見ると「いらつしやい。わあ、帽子よく似合ってる」と褒めてくれる。丸椅子に腰を下ろしふと顔をあげると、先日来たときに編んでいたカーディガンが出来上がっていた。「やつと完成したよ。今は余った毛糸で夫のチョッキを編んでるの」。ハンガーにびしっとかけられたカーディガンを手でさすりながらそういった。

「私ね、料理にはいろんなものを入れちゃうの。カレーにぎゅうり入れたり」。金勝さん、なんでも器用にこなしてしまうかと思いきや意外と大胆な一面もあるようだ。「あと、うちの前になつてるイチゴを取って来てジャムをつくるんだ。鳥に食べられる前に取ってこなきゃならないから鳥と競争よ」。私たちの笑い声に驚いたモモちゃんがこちらをチ

ラツと見て、ストーブに一番近い位置で昼寝を再開した。

環境の変化

教室には趣味を持ちたいと思う60代、70代のかたが訪れる。「話が盛り上がる」とやりかけのものを放ってお茶飲み会をするの」。気軽に足を運んで楽しめる教室をずっと続けていきたいそうだ。誰かに自分の趣味を知ってもらい、同じように好きになってくれたら嬉しいという。私も彼女の趣味を知る一人になることができた。

「こういうね、毛糸とか布を売ってお店が昔より少なくなっちゃったのよ。私自身はずっとそのまま同じことを続けてるから、6年前と変わってきたことはあんまりないね。ただまわりは変わってる。教室をやめる人がいたり、また新しいかたがいらしたりね。なんでも入れ替えてのがあるから仕方ないことなんだけど。それもまた楽しみの一つだよ」。懐

かしそうに昔の記憶を思い起こしながら、教室での新しい出会いに喜びを感じているようだった。

これまでずっと洋裁と編み物にかかわってきた金勝さんは、好きなことを続けられることが幸せだという。健康に気をつけて、いつまでも自分がしたいことを続けていきたいそうだ。「夫のことをね、昔はマンガさんと呼んできた。とつとも面白かったの。マンガさんはね、私が趣味を楽しんでしていることに理解を示してくれるんだ」。マンガさんが趣味を楽しむ金勝さんのようすをあたためたい目で見守る情景が頭に浮かんできた。

この教室に行くたびにどこか心がほっとして時間を気にせずおしゃべり続ける自分がいた。それは、いつでも好きなことに一直線な金勝さんの存在があるからだ。

風間悠花(地域社会学科1年) 〓文・写真

こてんさんは 連載 最終回 星

中里真琴（大学院文学研究科2年）＝文・写真

難しく考えずに、気軽に古典を楽しんでほしい。たとえば、お散歩しながら歌を口ずさむみたいにかつやまじょうあときつと当時の人の気持ちが伝わるはず。

本誌16号（※1）の連載記事では、勝山城跡から夜空を見上げている。私も夜の勝山城跡から星を見たい。星空観察は初心者だけれど、すぐに体が動き出した。

都留市川棚地区にある勝山城跡は、「城山」と呼ばれているサクラの名所だ。私もサクラの咲く時期に何度か登ったことはあるが、冬の夜に登るのは初めてのこと。2月4日、昼間は久しぶりに暖かい日だったが、夜は冷える。それでもわくわくした気持ちのまま、寒さなんて気にならなかった。

18時40分に麓に着き、懐中電灯を片手に登りはじめる。本誌16号では登りながらも星を見ているが、私は登りきるまでのお楽しみにしよう。と、足元だけに目を向ける。枯れ葉やスギの実が落ちているが、懐中電

灯がないと真つ暗で何も見えない。

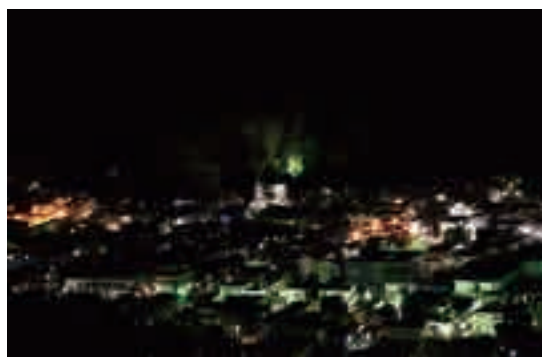
10分ほどで山頂に着いた。空を見上げると、満天の星が広がっている。何度も登った城山の新たな一面を知った。春はサクラに心を動かされていたが、今だけはこの木がなければもつと空が広がるのにも思ってしまう。

山頂の芝生に寝転がる。雲一つない晴天に恵まれて、一度にこんなにたくさん星が見られることに驚いた。星座に詳しくはないけれど、よく見慣れた星の並びを見つけた。冬の代表的な星座、オリオン座だ。特徴的な冬の冬になるといつも探してしまう。オリオン座の斜め右上に、小さな雲のかげらのようなものがある。調べてみると「すばる」といつて、おうし座のプレアデス星団のこらししい。いくつもの星が集まってできていて、視力がいいと肉眼でも六つほどの星を見ることができるようだ。「一つにまとまる」という意味の「統る^{すば}」という言葉からこの名

前がついている。古典の世界では、清少納言の『枕草子』に登場する。

星はすばる。彦星。タづつ

「星はすばるが素敵よね。それから彦星に、夕暮れどきに見える明るい金星も」。清少納言が一番美しい星としてあげているのが、このすばるだ。彼女が見ていた星と同じものを、こうして私も見ている。そう考えると、千年の月日があつというまののに感じられた。



山頂から見下ろした街並み（2019年2月4日19:50ごろ）



山頂から見えた星空。線でつないだものがオリオン座。その右上の丸で囲まれた部分がすばる(2019年2月4日)

この日は新月の前日で、月は見えなかった。花鳥風月という言葉があるように、月は昔から美しいものとされている。いつぼうで、星はあまり古典作品に現れない。観賞するものというよりは、時期や方角を示す目印や、占いに使うものという認識があつたからだろう。建礼門院^{けんれいもんいん}右京大夫^{うきょうだいのふ}という女性は、私家集^{しかしやう}(※2)のなかに星についての和歌を残している。

月をこそながめなれしか^よ

星の夜の

ふかきあはれを

こよひしりぬる

「月を眺めることには昔から慣れていたけれど、星の夜がこんなにも心動かされるものだなんて、今夜はじめて知ったことよ。」

これは、今から約800年前の12月の初め、午前2時半ごろのこと。彼女はこの日の夜空を、薄い藍色の紙に金箔を散らしたようだと表現している。

電灯がない時代、月のない夜は真っ暗で、星の光は今よりずっと明るかつたのだろう。城山の山頂には電灯がないから、ふだんより星の明るさが際立つ。きつと古典の世界の人たちも、こんな夜空を見上げていたのかもしれない。

星空を堪能して時計を確認すると、到着してから1時間が経っていた。つい時間を忘れて見入ってしまったようだ。名残惜しく感じながらも、もつと星座を覚えてまた来ようと思った。

千年の時間は、言葉も文化も、環境も変えてしまう。その変化を知って、当手を想像するのもおもしろい。けれど、今でも変わらず存在する植物や星の輝きもある。そして、それを見て感動する人の心も変わらない。古典作品を知ってお散歩すると、昔の人と同じものを見て、感じて、つながることができる。千年前の人との距離がぐつと縮まる。私が古典を好きだと思う、一番の理由だ。

※1「星見会」松本琢人 P.29 2003年1月発行

※2 個人の和歌を集めた歌集。『建礼門院右京大夫集』は和歌だけではなく、日記のような文章も多く記されている

特集「編み」を終える

今回私たちは記事越しに悩む人々魁力に導かれ、じつさには
その人々もとを訪ねました。何かを変えようと思わされてきたかた、
環境の変化を受け入れ自分らしく生きようとしたかた。変わらないうた
わけをもちてきたかた、みなさんは無敵夢中、ときにはおれたか
に過ぎしてはました。

たれにも譲るまいとする姿勢や好きなことを語るとき、明らかに
真剣な表情など、記事を読んだときに私たちが惹かれたこと
うはそのままでした。記事越しに感じるあなたにかまはさるに

解れたとき、私たちは毛糸の編み物を身につけたときのように
ホッとした。

お会いした人の人生は、喜びや悲しみなどさまざまな経験からできて
います。それは一つの編み物のようです。そのときどきと大切に編ん
できたものだからこそ、まわりの人をあなたかくする力でしょう。

また次にお会いするとき、その色や模様、形は変わっているかもしれ
ません。けれどあなたがはきくと変わらない。私たちは今回の再
訪でそう確信しました。



発行人

北垣憲仁 (48)

統括編集者

西教生 (38)

編集長

山内利奈 (38)

小泉篤広 (46)

平岡摩梨菜 (21-23,44-45)

副編集長

宇佐美温加 (1,6-7,18-20,48)

編集

塚原瑞穂 (24-25)

中里真琴 (42-43,46)

小俣溪和 (26-27,44-45)

窪田りさ (2-3,11-13)

江利そらむ (8-10,16-17,44-45)

佐藤琢磨 (6-7,30-31)

杉浦茜 (14-15)

高橋光 (4-5,28-29)

風間悠花 (40-41,44-45,46)

小林史佳 (32-34,46-47)

豊増華歩 (6-7,35-37,39)

表紙絵

成瀬洋平

特集ロゴ

堀江佳央

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD・NOTE no.100

発行日：2019年3月22日

発行部数：700部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので、気軽にいらしてください。

編集後記

あのころと変わったこと

あ

ついでに触っちゃだめ。そう言われたって、触ってみなきゃわからない。そんな私を心配した両親は、大きな事故や怪我に備えて三兄弟のなかで一番高い生命保険に入っていたとか。無事に成長した今でもやんちゃな性格は相変わらず。ただ、見た目の印象が少しは大人になったのでしょうか。外見と性格とのギャップに驚かれることがよくあります。『フィールド・ノート』の編集室は、落ち着いた場所。そこでの私しか見ていない編集部員の仲間たちは、まだ私の本性に気づいていないのでしょうか。 (中里真琴)

の

んびりお花を摘んでいると額めがけて何かがとんできた。真っ赤な体に黒い斑点模様をもつテントウムシです。私は驚いて黄色いタンポポを片手に、大口を開けて泣きました。私につられたのか隣にいた友だちも泣き始めます。そのワンショットをとらえた写真が、一時期保育園の入り口に飾ってありました。なんて恥ずかしいことでしょう。子どものころ、私の目で見える生きものたちは、今よりももっとずっと大きかったのかもしれませんが。ときどき、あのころの小さな体と無邪気な気持ちで広い原っぱを駆け回りたくなります。 (風間悠花)

日

曜日まで待ちきれない。小学生のころは、楽しみなことがあると待ちきれない性格でした。週末はよく家族と遠方に出かけていました。口癖は「早く土日が来ないかな〜」。しかし今の私は家族と出かける機会も少なくなり、1日があつというまに過ぎていきます。年齢を重ねるにつれ、時間の経過が早く感じることを「ジャネの法則」というそうです。楽しかった時間は小学生のころのように、ちゃんと噛みしめて覚えていたいな、と思う今日このごろです。 (小泉篤広)

次回予告(仮)



い



ろ

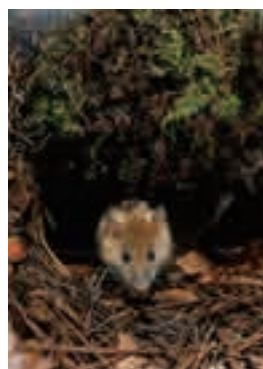
ど



る

2019年6月発行予定

生きいきとした姿に出会う楽しみ



2002年に『フィールド・ノート』が誕生してから、これまで私たちは地域の身近な生きものたちをじかに観察し、記録してきました。また、神社に出かけてムササビ観察会を開催したり、リスとの出会いを楽しもうと本学のキャンパスでクルミの木を育てたりしてきました。観察が難しいとされているカワネズミ(※)の観察装置を工夫し、夜の森で観察することもあります。

それは、生きいきとした本来の動物の姿に出会うことで、忘れかけていた子どもたちの驚きや感動といった感性をもう一度呼び覚ましたいからです。感性を磨きながら、これからは地域の自然とのよりよい関係のありかたを、みなさんとともに考えていきます。

※表紙の絵で描かれたカワネズミは、山間の溪流をすみかとしています。ネズミという名がついていますがモグラの仲間です。目はほとんど見えませんが、水中でヤマメなどの魚を巧みに捕らえることができます。

フィールド・ミュージアム

『都留フィールド・ミュージアム』とは？：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川(相模川)流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。

FIELD・NOTE
no. 100

発行日 2019年3月22日 (年4回発行)
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』編集部

